男性も乳がんになる

男性乳がん体験者　野口晃一郎

岐阜県から参りました野口と申します。かって新聞記者やアナウンサーをしていました。今はフリーのライターとして医療関係の記事を担当しているほか、大学や企業などで広報アドバイザーを務めています。

男性乳がんの発見

自分が乳がんだと知ったのは、約３年前のことでした。左胸に痛みを感じ乳頭にも変形が見られ、男性ながら不安を抱えていました。周囲の目を気にしながらも、乳腺外科を訪ね一通りの検査を受けました。その結果、悪性の腫瘍が見つかりました。その後胸部とリンパ節の切除手術を行い、三ヵ月後には仕事に復帰することが出来ました。

男性乳がんの治療

男性乳がんは大きく分けて四つのタイプがあり、治療法としては放射線・抗がん剤・ホルモン剤等ですが、私の場合は抗がん剤は使用せず、ホルモン療法を行っています。最低５年間は服用との事（現在は１０年間に延長）。　１年後・２年後の検診も異常なしで過ごしています。日本では男性の乳がん患者は年間600人程度とされていますが、認識がほとんどなく発見が遅れてしまうそうです。私の場合は幸いにも、仕事上新聞で乳がん特集を毎年担当していたということもあり、男性が罹患することを知っていました。早期発見であれば、生存率が高いことをも理解していたので、その場合乳腺外科を受診すればよいことも分かっていた訳です。

アメリカの患者との交流

当時この病気に関しては、まだまだ情報が少なく不安があったころ、アメリカに男性乳がんの会MBCCがあることを知りました。日本人としては初参加でしたが、「自分と同様に罹患した患者さんたちと意見交換したかった」というのが動機です。

実際に参加してみて、「患者としての苦しみや思いを共有出来たこと。そして自分ひとりではないという心のよりどころを持つことが出来た」というのが実感でした。写真がその時のものです。いかにもアメリカらしく「裸になって乳がんを知ってもらおう」というパフォーマンスです。

日本での取り組み

その後、日本でも男性乳がん患者のサロン「メンズBCの会」が発足し、キャンサーネットジャパンさんが主宰しています。同じ患者さんたちがいることに安堵すると同時に、専門医による講演で知識を深めることが出来るようになりました。そして再び渡米、MBCCと再会しました。仲間のいる安心感、そしてあらためて1人ではないと実感しました。

このとき強く感じたことは、日本での男性乳がんの啓発活動の必要性でした。帰国してからは、新聞・テレビ・ラジオ等で発表する機会も増え、Mo-Festaでは昨年・今年と2年続けてお話する機会が出来ました。

今後の課題として、「日本での男性乳がん患者の会の立ち上げ、乳がん体験者コーディネーターを取得、MBCCとの連携、男性乳がんの啓発活動」を目指しています。

（要約：鈴木武）